

補助色票 240種を併用し、隣接法による比色を行った。その他の条件は天然光の拡散間接照明を用い、照度 600 lx (± 100)、色温度6000°K (± 500 °K)の範囲に相当する天候と時刻を選んで比色を行った。

3. 色相は24色相中19, 22の2種以外は全部使用されている。但し22色相を要約して系統的に分類すると赤橙黄、緑、青、紫、茶及び白の8系統となる。しかしこれらの系統に濃淡の変化が与えられる結果として同一染料を用いても色相の移動が表われるから、測色学的分類の上では22色相になるわけである。縹緗効果を表わすこれら各色の濃淡を明度差の上から考察すると、最高最低の明度の中間を大体等差階段に分けられているので色刺激の漸進変化による興奮の律動化がしかも音楽のリズムの効果を表わすものと考えられる。このような問題は衣服デザインの色彩効果にも役立つことであろう。

53. 縹緗彩色の色彩分析 (古式染織品の色彩)

奈良女子大 川端 泉
山崎 勝弘

1. 従来勘の働きに依存してきた配色の問題を科学的に裏付けるために色彩分析を試みた。分析の対象としては長年月の間に洗練されてきたであろう所の古代染織品を選び、配色効果の秩序とか規則性を見出すために特に縹緗彩色に重点を置いた。

2. 正倉院裂の整理を手伝う機会が与えられ、保存性のよい、比較的褪変色の少ないものの中から、縹緗錦33種と刺繡残欠8種を選び、日本色彩研究所の標準 200色、日本色名大鑑(上村、山崎)の色紙83色、その他にた。